

「中国の歴史研究」講演会 速記録

主催：東京財団

講師：程兆奇（上海社会科学院研究員）

張連紅（南京師範大学教授、南京大屠殺研究センター主任）

日時：2007年1月30日 15:00～17:00

場所：日本財団ビル

【司会】 今日是最初に程先生が40分以内で、続いて張先生が40分以内でお話いただき、たっぷり意見交換の時間を作りたいということでございます。早速、程先生にお話いただきしたいと思います。ではどうぞお願いいたします。

【程】 まずは東京財団にこのような機会をご提供いただきまして感謝申し上げます。

中日両国のいろいろな交流の中で、一衣帯水という言葉をよく使います。しかし、両国の関係は、海をはさんで短い距離という表現が使われておりますが、この海には、むしろうねりさかまく波があるかもしれません。場合によっては、その海を越すことができないような悪天候かもしれません。去年は、おそらく皆様も記憶に新しいことだと思いますが、中国では反日デモが起きました。そして、日本のメディアは反日デモを幅広く報道いたしました。これはある意味で両国関係の象徴的な出来事となりました。私は、中日両国の間の関係は、今、とても不安定だと思います。いつでも問題が起こり得る。問題の度合いは、どれだけ深刻なのか。それは私たちの意思を超越したものであります。なぜそうなるのか。いろいろな理由があるかと思えます。私自身もいろいろ考えています。

1980年代の半ばから、私は日本のメディアや日本の総理府が行う世論調査に注目をしております。80年代の半ばを見ますと、当時の日本人たちの中国に対する感情はとてもよかった。好感があった。アメリカに次ぐ好感度だったのです。それは日本の長年にわたって、例えばあまり好きではないと言われている韓国やロシアを大きく上回る地位でした。しかし、90年代の半ばになりますと、一挙に対中好感度は落ちてきたわけです。そして、今はおそらく最低のところまで来ているのではないかと思います。

その理由はどこにあるのか。その理由はおそらくいろいろあると思えます。例えば90年代に入りまして、日本のバブル以降のことになりますが、日本の不況が直接中国と関係

があって日本は不況になったと言う人もいます。また人によりましては、日本にいる中国人のいろいろな凶悪事件がメディアで取り上げられたこと、新聞を開けばほぼ毎日のように、中国人の犯罪が報道されるという影響があるのではないかという声もあります。こういったさまざまな理由が見出されるかと思います。

しかし、最も根本的な問題は歴史問題だと思うのです。その歴史問題の中でも、なぜ日本が南京事件と言うのに、中国は南京大虐殺というのか。なぜ、この問題に、みんな注目するのか。この問題は、日本の学者の方もおっしゃっているように、あらゆる問題の象徴的な問題になっています。その最大の問題を解決しなければ、安倍さんが首相になって、両国関係は表面的に改善されたように見えますが、いつまた問題が出てくるか、だれにもわかりません。

もともと私は、ここに来るのは座談会のような交流なのだろうと。あるいは専門家の座談会だろうと考えておりました。それで、南京大虐殺あるいは南京事件について話をしようと思っていたのですが、ほんとうについさっきなのですが、これは公開の講演会であるということを知りました。したがって、南京事件について話をするのは、いろいろな具体的な話になってくるのですね。もしかしたら、皆さん、こういったことにあまり興味をお持ちではないかもしれない。そこで、私は全般的な歴史、つまり両国の歴史の見方について、どのような問題点があるかという全般的なお話から始めたいと思います。

2つの側面について話をしたいと思います。第1に、私も中国の学者であります、自分でも反省すべきところがある中国の問題点についてです。まず、そこで申し上げたいのは、中国の学者、あるいは中国人の目に見えるもの、日本についてどのような問題が映っているかということです。もちろん日本がすべて間違っているとは言いません。まず、私から見て中国側の問題点について述べたいと思います。

去年9月初旬に、中国である映画が上映されました。『東京裁判』という映画です。この『東京裁判』は、中国での上映状況は本当に大盛況でした。つまり興行成績が大変よかったのです。いろいろなメディアの報道を見ましても、その映画は客観的に真実を伝えたと言っています。1980年代以前の有名な監督ですが、ソシンさんという人がいます。ソシンさんも自分で言いましたが、「10年以上、映画館には行かなかった。しかし、今回は切符を買ってこの映画を見た。そしてとても感動した。」と言っています。なぜ感動したか。それは「歴史の真実を明らかにしたからだ。」と言っています。このような報道に関して、ホンさんという女性監督がいますが、その人は全く逆のことを言いました。この映画

の力はどこにあるのかと聞きました。これは客観的な真実の、歴史の再現にあるということを行っているのですが、この映画は上海が投資をして作ったものです。そして上映前、上海映画集団（公司）が、私と私の同僚に事前に見せてくれました。試写をしてくれたのですね。私は見まして、この映画は、中国の映画史上で、確かにこれまでとは違う特色があると言いました。というのは、大量に日本の俳優を起用しているということ。また主な言葉ですが、日本語と英語で演じられているのです。これは中国の映画の中ではあまり見られなかった特色です。それと同時に、私が見まして一番大きな問題を感じましたのは、客観的に歴史の真実を再現してはいないということです。

その例を挙げようと思ったら、本当にたくさんあるのですが、幾つか具体的な例を挙げたいと思います。例えばインドの裁判官、パールさんという人がいます。この映画の中で、中国の裁判官のバイさんという人ですが、この犯罪容疑者に罪があるということで、一致した見方がありました。ただ、違うのは、量刑について、どのような量刑が適切かということについて、意見の不一致があったのです。もちろん罪であるということは同じだったのですが、パールさんは、罪はないと言いました。そして、オランダの裁判官レーリンクという人も、罪に対して留保の態度を示しました。そしてその後、じっくり考えながら、中国の裁判官バイさん、そしてインドの裁判官といろいろ議論を戦わせます。その議論の中で、インドの裁判官はこう言います。私たちの主張は、来世でまた因果は報われるだろうということを言いました。そして、パールさんはなぜ東京裁判に反対したのか。それは自分自身が西側の植民地、要はインド自身が200年の植民地支配を受けていたのです。そして、黄色人種である日本が白色人種である帝国主義というものに反対して、大東亜共栄圏を目指したということ、これがパールさんの心を動かしたということです。これが正しいか、間違っているかということとはとりあえずさておいて、仏教の立場から反対をしているということです。これは少なくとも真実というものを描き出したわけですから、これは大変驚くべき描き方でした。

オウ・トクフさんという証人が東京裁判で証言をしたのです。3人の和尚さんが、お寺で日本の兵隊に捕らわれました。そして、強姦をするのですね。その3人の和尚さんたちは強姦をすることを拒絶して、結局、生殖器を切断されるということになりました。そして、その後、聞かれました。今この裁判という場に立って、当時、強姦に参加したかと。あなたの生殖器は切られなかったかと。メディアがこれについて報道する中で、この場面を見まして、中国人はみんな憤慨いたしました。そのオウさんの証言ですが、そのとき、

オウさんは証言するだけで大変大きな罵声を浴びたのです。それは、中国人にとって一番怒り心頭に発する、罵りの言葉を吐いたのです。『東京裁判』は、歴史的な証拠と言えるものではなく、映画全般を通して見ますと、主な重要な場面はほとんど創作になるわけです。

私には大変感じる場所がありました。いろいろな報道で、この映画には真実があって、その真実こそ力があると言っていますが、私が感じたのは、実は多くの部分が捏造だったということです。創作したもの、作り出したものであるということなのです。本当に真実を知りたいのであれば、このような創作というものがどれだけの役割を果たせるでしょうか。私はそう思いました。したがって、この映画の例は、本当に極端な例かもしれませんが、私は今、中国の問題点について語っているわけですが、多くの文学作品の中でも同じようなことがあります。もちろん文学作品というのは虚構が必要ですが、文学作品も歴史をモチーフにするのであれば、主だったところは、何でもありで捏造していいというわけではありません。

この映画から私は感じました。こういうふうに一般の観衆に伝えることによって、どのような結果がもたらされるだろうか。その結果は、一層のこと、いろいろな義憤とか、恨みとか、憎悪を両国間に呼び起こすだけではないかと思ったわけです。私は、中国人にこういうことを言いたかったのです。そこで、私がこの映画を見まして、多くの点でこのように思いましたと言いましたら、是非それを論文にしてもらいたいという要望がありました。この映画に対して非常に評価が高いということですので、今、私は異なった意見を述べました。実際、やはり難しいことがあります。上海がお金を出しまして、私は上海の人間で、上海が作った映画をここで批判するのは心ないことですが、でも、これは私にとっては、中国人が反省しなければならない問題であると思います。テレビを見ますと、あるいは日本と関係がある多くのドラマ、特に戦争時代のものを見ますと同じような問題があります。日本人が見れば、当時の日本人に対して批判的な態度を持っていても、これは日本軍ではないと思う日本人が多くいらっしゃると思います。ですから、このようなことは中国人に言うべきことだと思います。ここで私は反省という気持ちを込めて申し上げました。

次は、日本の問題についてお話をしたいと思います。もちろん日本は中国と違います。日本は非常に成熟した多元的な社会であります。多くの意見があるということです。多元的な社会ですので、いろいろな意見があると思います。私は、ここで虚構派(まぼろし派)に関してお話をしたいと思います。

根本的には、私は学者として多くの史料などを読んで感じたことですが、東京裁判は、やはり多くの問題があると思います。多くの問題を残しております。しかし、当時の実際の状況はどうだったのか。それを総合して見なければなりません。1つの数字だけを取って見るということではなく、あるいは、そこに真実があるかどうかということだけを見るのではなく、全体的に見なければならぬと思います。日本の第10軍について史料を集めて分析してみました。そして、私自身の経験、あるいは周りの人たちの体験を聞きまして感じたことをお話ししたいと思います。

日本の第10軍が上海に上陸しました。当時上海にいた私の母は避難を夜着なくされました。私の同僚の一人にチンさんという人がいますが、彼のおじいさんは農民でした。そして、ハウザンというところで日本軍に殺害されました。私は数年前に本を書きました。日本の虚構派(まぼろし派)についての本ですが、その序を書いて下さったオウカハンさんという人がいます。彼は1938年に生まれましたが、南京事件の後ですが、コウサンという所にいました。彼のおじいさんは労働者でしたが、やはり殺害されました。

そして、南京でどういうことが起きたのかということについて考えました。東京裁判のことを今考えてみると、多くのことが真実ではなかったと言えます。それを否定しなければならぬということです。しかし、当時、第10軍が上海に上陸してから、この地域の中国の人々の生活の基盤を全部破壊してしまったということが言えます。ですから、日本のまぼろし派は、やはりそのことについて認識しなければならぬと思います。

先ほども申し上げましたが、私の研究、中国での研究、あるいは南京裁判などについて、やはり否定しなければならぬ内容がたくさんあったと思います。私は最近、長い論文を書きました。その中で私は、中国で初めて、「現在の史料をもって、殺害された人数を確定することはできない。」ということを行いました。そして、私の父親たちも、戦争が原因で一家離散されましたが、そういうことについて日本の人々にも、やはりその当時のことを想像していただきたいと思います。当時、なぜ戦争が起きたのか。そしてどういう結果をもたらしたのか。日本も同じ戦争の被害を受けております。世界で唯一、原子爆弾が落とされた国であります。広島、長崎ですね。ですから、こういうことを言いますのは、日本のまぼろし派の人々にも考えていただきたいからです。

以上のように、1つは中国の問題もありますが、もう1つは日本の問題もあろうかと思えます。そしてもう1つ述べたいのは、こういったこと、つまり南京大虐殺(南京事件)をめぐる、中国の学者、日本の学者が、今ともに研究をする可能性はどこにあるのか。

そして、困難はどこにあるのかということについて述べたいと思います。

中国は今、研究の面でいろいろ新しい変化がございます。特に最近、中国の学者は自分たちの反省に立つというのでしょうか、考え直すことをしております。長年にわたり、日本の学者の努力があるわけですし、私たちに多くのヒントを与えて下さいました。これはとても大きな関係があると思います。長年にわたって、中国では、南京大虐殺（南京事件）の研究は、どちらかといえば、政治やイデオロギーの影響を受けてきました。これは否定できないことだと思います。

最近数年のあいだ、中国では大きな変化がございました。これにつきましては、後ほど、張連紅さんが、南京師範大学で新しく南京大虐殺研究所というものができておりますので、その所長さんは大変年配な方なのですが、実質的には張連紅先生が、この研究所の責任者としていろいろなことをやっていらっしゃると思います。張さんは、最近、大変長い論文を書かれました。その論文は過去20年間の中国での研究状況についてまとめたものであります。それについては、張連紅先生が後ほど詳しく述べて下さると思います。私は私の考えを述べたいと思います。

本当に今日は大勢の方が来て下さいましたが、中国の研究は確かに皆様にはなかなか感じていただけないような難しい状況がございます。どういうことかと言いますと、中日戦争以降、1990年代後半になるまで、ますますひどくなっているのですが、中国民衆の中での反日感情が高まっています。ますます強くなっています。反日感情が強くなっているのはなぜか。それぞれの異なる角度から見ると、それぞれいろいろな見方があるでしょう。日本では多くの方が、これは中国政府の長期的な反日宣伝の結果だというようなことを言っている人がいます。私も、そういう扇情的な報道なども目にしました。もちろん中国では、当時、日本軍が中国でどのような残虐なことをしたか。その残された中国の人たちに印象というか、記憶というものがあることも、その1つの側面でしょう。

中国の学者が難しい状況にあると言いましたが、それはどういうことかと言いますと、中国の民衆は、確かに今、中国の学术界にも大きな影響を及ぼしております。日本は多元的な社会です。例えば、何人が殺されたという主張をしても圧力を受けることはないでしょう。例えば笠原先生ですが、大虐殺はあったとする笠原先生は中国ではとても尊敬されています。しかしだからといって、何か問題があるということではありません。笠原先生の本は出版できますし、笠原先生の身に危険が及ぶということはありません。日本にはいろいろな見方をしている研究者の方がいらっしゃいます。もちろん私は皆様にも同じこと

を感じてほしいと言っているわけではありません。ただ、中国の学者というのは、確かに今、日本の学者にはなかなか感じてもらえないような難しさを感じています。

今日の午前中、私どもは東京工業大学のある先生をお訪ねしました。その先生がおっしゃいました。反日感情がいつから始まったのかという話になったのですね。もし反日感情について反省をするならば、中国の周辺に対するいろいろな感情は昔からあったのです。このような感情は、なかなかすぐに変えられるというものではないのかもしれませんが。

今日の午前中、その先生とお話をしたときに例を挙げました。例えば漢の時代、辺境の地域にフカイシという将軍がいました。このフカイシという人は、今は既に消滅した楼蘭という国の支配者だったわけであります。楼蘭は漢の王朝に服従することを約束したのです。しかし、結局は漢の王朝に騙されて殺されたのです。司馬光が『資治通鑑』の中で、このことを批判しています。とても厳正な態度で、こんなことをしてはいけなかったと批判しています。フカイシが殺されたのは、これは仁義に合わないとは批判しているのです。なぜ、このフカイシは殺されたか。もし殺すのであれば、騙したりおびき寄せたりしないで、殺すなら正々堂々と殺せばいいというような批評の仕方もしているのですね。中国の明の時代が滅びようとしているとき、中国の士大夫は、国が滅びる痛みというものを感じたのでしょうか。清朝の時代が近づいてくると、いろいろな人が殺されました。多くの人がカテイやヨウシュウというところでも、ほんとうに多くの遺体が転がるというような、いろいろな悲劇がありました。そして、そのとき、オウフウシという人が司馬光のことを批判しました。司馬光はかつて、フカイシの事件を批判した。それは批判すべきではないと言ったのです。それはなぜかといいますと、周辺にある楼蘭国、あるいはフカシイは人間ではないというような蔑んだ言い方をしているのですね。つまり人ではないと。ですから、人道的な扱いなどをする必要はないではないかというような見方をしているのです。オウフウシが、このように司馬光の理性に適う批判をさらに批判した。

これは宋の時代以降、北宋が滅ばされて、各地でいろいろな殺害が起きました。そのとき、士大夫の人たちというのは、中国の文化、あるいは中国の王朝の滅亡、つまり、いろいろなものが分離するということを感じたのです。中国の文明が壊れていくということを感じたのです。そのような時代で、周辺の諸国・民族に対して、大変強い抵抗、違和感を覚えたのです。それは大変強い感情でした。それより前の時代にも中国には、周辺の少数民族を卑下するような呼び方がありました。例えば、東夷や北狄、南蛮、西戎とかというような言い方です。このような言葉を見ていると、少数民族の名前というのは、当時は

けものへんとか、虫へんだったわけですね。動物とか、そういうものと見て、同じ人と見ていなかったわけです。しかし当時、全般的に言うならば、唐の時代までは何とか平等な交流は保っていました。しかし、宋の時代になりますと、特に北宋以降、いろいろな境界、隔たりが出てきたのです。中世の思想家であります朱熹は、こういうことを言っています。君子、父親の恨みというのは、1万世代経っても、これは必ず仇を討たなければいけないというようなことを言っています。

つまり、私は本当に腹蔵なくお話をしたいのですが、率直な気持ちで述べたいのは、今、私たちが難しいというのは、指導者が例えば愛国という言葉を使うならば、すぐに民衆は、これをすばらしいと支持することです。しかし、愛国というのは口に出すのはとても簡単ですが、本当は言葉に出さずに、国を愛することが一番難しいのです。責任ある態度を取るというのは、勇気を出して行動するということですが、21世紀の今、どうすれば本当に自国の人たちに一番有利なのか。そして、周辺の国との関係をどうしたら一番いいのかということを考えるべきなのですが、今は、それが実は難しい。ここ数十年の政権、あるいは明、清の時代もそうでしたが、大変根深い階級意識があるのですね。蔑む意識があったのです。今、日本に対する反日ですが、日本にちょっと集中しているような感じもします。他の国に関してもややあるのですが、日本ほどではない。少し他の国に対しては弱まっています。日清戦争以降、特に中日戦争の間、中国はいろいろな被害を受けたわけでありまして、そのため、今、いろいろな反日感情が集中しています。ただ、これは実際には長年の周辺を蔑むような意識が作用していると私は思うのです。

南京大虐殺に関して私の根本的な考え方というのは、一方で、私は中国の学者であるわけで、問題の設定はやはり日本の学者とは異なるでしょう。そう思います。しかし他方で、私はむしろ歴史事件として学術的な手段で研究をしたいと思っています。学術的手段、具体的に言いますと、史料とか、文献に書いてあることに基づいて、研究をしたいと思うのです。

私はこのように考えております。ですから、先ほど私の立場も申し上げましたが、日本軍が上陸してから、私の親戚も被害を受けて避難し、多くの中国人が被害を受けております。このようなことに対しては、日本の方にも理解していただきたいと思います。南京大虐殺のことについては、やはりいろいろな史料に基づいて研究をする必要があると思います。私は多くの時間をこの方面の研究に費やしておりまして、1つの問題に、それを総括することができると思います。例えば、ある人は何人ぐらい殺されたかということに総括

することができるのではないかと言う人もいます。しかし、私はそのように思っておりません。史料に書いてあるものと真実は距離があるのではないかと思います。真実は1つしかありません。歴史というのは、多くの異なった人の異なった解釈があります。そして、結果も非常に異なっているかもしれません。この中には、やはり立場の問題とか、いろいろな問題があると思います。しかし、しっかりした根拠というものがなければなりません。その根拠は史料であります。ですから、私が質問したいのは、どのくらい人が殺されたかとか、そういう問題ではなく、史料によって、それがどの程度説明できるのかということですね。多くの問題も同じように史料に基づいて研究しなければならないと思います。

私の論文を配っているかどうか分かりませんが、私が去年書いたものです。7万字ぐらいの論文を書きました。当研究院の雑誌にも発表しておりますが、この長い論文は、日本の史料についての研究です。この中で3つの問題を述べております。1つは、現在の史料に基づいて、要するに殺害された人数の問題を確定することはできないということ。それから、南京裁判のことですが、南京裁判で言っていることと、実際にどのぐらいの人が殺害されたかというのは、いろいろ問題があると思いますので、私の論文の中には、いろいろな見解を述べております。まず史料に基づいて研究するということ。日本軍が南京でいろいろなことをした結果、南京裁判がありました。中国の人々の心の中では、やはりこれは1つの事件になるということで、史料に基づいて、日本軍が南京でどのようなことをしたのか、そのことについて研究をする必要があります。それからもう1つは、松井石根という人物についての評価ですが、日本では多分こういう問題はないかもしれませんが、中国では松井石根は南京事件の責任者であると考えられております。彼が命令をし、日本軍がさまざまな暴行を南京で行ったということです。しかし、彼はその罪を全部否定しております。そしてもう1つ、このようなことを書いております。松井石根が命令したかどうかという証拠がないのですね。史料がないということです。私の論文の中で、そういうことも書きました。

今回は、南京大虐殺についての講演会だと思いましたが、来てからわかったのですが、一般の聴衆の皆様に対してお話するということですので、私は、こういうことを申し上げました。この後は、張先生の方からお話があるかと思います。中国のここ20年来の研究の成果について、張先生の方から話をしていただきたいと思います。ありがとうございました。

【張】 今日、こちらに参りまして、皆様とともに中日間の歴史問題について議論し、

交流できること、特に南京大虐殺を中心に交流できることをうれしく思います。

先ほど、程先生もおっしゃったように、私は最近、ある論文を書きました。それにつきましてご紹介したいと思います。南京大虐殺について、中国でここ20年来、研究にどのような変化があるかということについてのものです。ある意味で、この論文を書いた趣旨は、反省することが重要であるということです。これまで中国の20年の研究で、どのような問題点があったかを見直すということです。そして、日本の研究はどうだったかということと比較しています。そして、私たち中日間で違いがあるとしたら、どういうところなのか。問題があるとしたら、どう解決したらいいのかということを書いています。

最近、政府間で歴史の共同研究という枠組みができ上がりました。既に第1回の会議が持たれています。今の状況で見ますと、学者の間で、いろいろな評価、異なる見方があります。しかし民間は、中国の共同研究に関しては大きな期待を抱いているとは言えません。どちらかといえば、マイナスの評価のほうが多いように思います。それは70年という時間が既に過ぎているわけですが、中国と日本の中で歴史問題をめぐって、なぜこんなに大きなギャップができてしまったのか。人によっては、南京大虐殺なんかはなかったと言いますし、また死亡者は少なかったと言う人もいます。そして、民間人で殺害された人はいないという主張をする人もいます。一方、南京大虐殺は大規模なもので、30万人以上が殺されたと言う人もいます。アメリカにいる中国人で、40万人以上が死んだと言う人もいます。なぜ、こんなに大きな差が出てしまうのか。その理由について私は考えました。中国の学者として考えてみました。そして、私たちも考え直すべきところ、反省すべきところがあるのではないかと思ったわけです。私たちはこの問題を解決する方向に向けて努力をしなければいけないと思います。つまり、その中で反省していくこと、見直すことも重要だと思ったのです。

これまでの経緯などを振り返ったわけですが、反省していく上での前提としました。学者として、まず私自身どうだったかということを考えてみました。真実の歴史を中国人自身に伝えたのかどうか。そして、日本人に伝えたのかどうかということです。簡単に振り返ってみただけでもわかりましたが、中国でも、日本でも、南京大虐殺の研究はまだまだ時間としてはとても短いのです。本格的な研究は、中国でも日本でも、まだ20年余りの歴史しかありません。この20年余りの歴史の中で、私は共通の認識は見出されると信じています。歴史認識は、本当に長い時間をかけて、いろいろ実践的な議論や模索を経て近づいていくということなのかもしれませんが、しかし、中国と日本の場合、南京大虐殺に関して

はいろいろな溝があります。

1949年から80年代に至るまで、中国では、この人類の歴史の中では大変大規模と言える暴挙について研究がなされなかったということについて、まず我々中国の学者として反省しなければいけません。そして80年代以降、このような研究を行うようになったのは、どのような目的からか。実際に1949年から80年代の初めに関して、何も研究がなされなかったのはいろいろな理由があると思います。もちろん政府とか、イデオロギーの観点から言うならば、南京大虐殺だけではなく、すべての歴史問題が空白になってしまいました。特に明国時代の歴史については学術的研究はなされませんでした。主に研究されたのは国民党と共産党の歴史認識、特に共産党の歴史認識の問題であります。学術的に明国の歴史を何か研究するという事は、その当時は存在しませんでした。そして80年代以降になりますと研究が始まったわけですが、その主な理由は、日本側でまぼろし派という人たちが出てきて、それに対抗するという目的があったと思います。そして、中国の学者は、その問題の研究に入る際は、どちらかといいますと、日本のまぼろし派の意見に反駁をするための研究となってしまいました。そして、学者としての本来の立場、学術的な立場からではなく、反論のための研究になってしまったわけです。そのため、当時のさまざまな論文、成果を見てみましても、どちらかといいますと、対抗するための研究になっておりました。

そして80年代以降、ここ数年の研究を見ましても、確かにそれ以降はいろいろな変化が見てとれます。論文を見ましても、前向きに変化を見て取ることができます。日本では、多くの学者の方、あるいは一般の方々が、ほんとうに中国の南京大虐殺の研究の変化をなかなか感じたりする機会はないのかもしれませんが、でも、実際に中国では、研究は今、変化しており、進歩しております。

中国はこの20年間、絶えず前進を続けてきました。それは頻りに中国に行って交流をすればわかるのかもしれませんが、笠原先生が最近本の中で書かれているように、中国の変化を感じ取ってくださっている先生もいらっしゃいます。とにかく中国としては、いろいろ変化がございます。また学者の中でも、重視の度合いも変わってきています。日本の学者に比べますと、南京大虐殺の研究に携わっている研究者は全国でも数少ないのですね。10人以下だと思います、これを専門にしている人は。他方、日本では研究をしている方は、肯定派、否定派を分けずに数えるならば、大変多くの方が研究していらっしゃると思います。90年代以降現在に至るまで、中国ではいろいろな研究機関が作られました。例

例えば、私が現在所属する南京師範大学では、1998年に研究機関を作りまして、このテーマについての研究をしております。2006年10月に、南京大学でも研究機関を作りまして、若い人たちにこのテーマの研究に携わってもらおうとしております。これは大変重要なことだと思うのです。やはり一定数の研究者がいなければ、このテーマに加わらなければ、この問題は場合によっては永久に解決の糸口は見出せないかもしれません。多くの方がこれに携わっていくということが重要だと思います。これがまず第1点です。

そして2番目に申し上げたい重要な問題としましては、大虐殺の研究をする場合の史料の問題だと思います。これまでの研究が根拠としてきた史料は、どちらかといえば少ない史料でした。あるいは単一的な、一方的な史料でした。80年代前半の研究では、使っている史料は3冊の本です。歴史的な記録や史料でしたが、この史料はどこのものかといいますと、多くのは中国側の史料だったのです。日本での史料とか、海外、つまり第三国の史料は少なかったのです。しかし90年代になりますと、西側の人たち、安全区にいたポートリンといった人たちの史料で、当時のいろいろな記録が発見されるようになりまして、今世紀の初頭には、海外の学者とともに、こういった関係史料の収集に当たりました。これは歴史の研究をする上で一番重要なところですよ。まずは大量の史料を集めなければいけません。その史料をベースにして共同の研究をするということが次のステップだと思います。

そして2005年以降、その史料集を出版しました。2006年1月には、既に28巻の本を出しております。この28巻というのは漢字の文字数にして1,500万字になります。この作業はさらにこれからも続けていく予定であります。おそらく今年の12月の初めには、さらに20冊程度の史料集が出てきます。これらはいずれも南京大虐殺をめぐる史料です。このように合わせて50冊に上る内外の史料をすべて出版いたしますと、このテーマの研究をする上で共通の認識を形成する上でとても重要なことだと思います。

学術的な視野から、こういった史料の収集をしているわけです。史料を収集するにあたり、私たちは次のような原則を保っています。中国側にとってはもしかしたら不利に映るような史料かもしれませんが、これも収録しています。何ら削除はしておりません。大学、あるいは学術というような観点から、やはり研究をする史料は確実なものでなければなりません。もしかしたら南京大虐殺はなかった、とするような史料も収録することになります。あるいは虐殺の規模、度合いについて、ほかの人たちに見てもらい判断してもらうということです。史料については、とにかく集められるものは集めるということで、これは

我々の研究にとっては価値あることだと思います。

3つ目に、南京大虐殺に関する研究ですが、今、非常に活発に行われております。多くの調査なども行ってありまして、研究も深まっております。そして、個別のテーマについての研究も行ってあります。80年代、90年代初めの頃の論文は非常にマクロ的、一般的な内容でしたが、しかし、今は、こういうものは少なくなってきております。具体的な事例、例えば、中山門外の事件ですね。日本軍はどのようなことをしたかということについて研究をしております。あるいは金陵大学では、どのようなことが起こったのかということについても研究しております。今、金陵大学になっておりますが、そこは当時どういう状況だったのかということについて、具体的な研究を行っております。中国人の証言、日記、あるいは当時の外国人の日記などをもとにして研究しております。このように、事実に基づいた研究を行っております。

もう1つの特徴は、中国の史料に基づくだけでなく、日本の最新研究、史料についても研究しております。例えば私の隣にいる程先生ですが、程先生は日本の史料もよく読んでありまして、日本の史料についても非常によく知っております。ですから、彼の研究は非常に深まってきております。日本語がわかっていて、日本の史料について研究している学者は中国では非常に少ないのです。日本も同じように、多分、中国語がわかっていて、中国の史料について研究している人はそれほど多くはないと思いますが、中国も同じです。しかし、このような状況は、中国の人々の考え方を変える面で、あるいはもっと視野を広めてものごとを考えるということに対して、非常に有益なことだと思います。ですから、個別のテーマについての研究が非常に深まってきていると言えます。

それから、中国の研究のもう1つの特徴は、反省しながら、あるいは比較しながら研究を深めてきていることです。2005年には、私は南京大学の同僚とナチス大虐殺と南京大虐殺の比較についてのシンポジウムを開催しました。南京大虐殺は、日中間の問題として取り上げられているだけではなく、それを人類全体の視野に立って考える時、なぜこのようなことが起きたのかを考える上で、非常に有益だったと思います。もしかしたら将来も同じようなことが起きるかもしれません。その場合、どのような方法でそれを阻止するかということについて、ナチスの問題と南京大虐殺を比較しながら研究しました。そうしますと、反日という考え方は持たないで、それを人類の歴史上の問題として考えることによって、多くの共通点を見出すことができると思うのです。ですから、私どもの研究は、このような変化が今、現れてきているということが言えます。

この歴史的事件は、今の人々にとって、どのような影響を与えているのかということも考えなければなりません。歴史的な真実と我々の感情的なものとの間に、どのような差異があるのか。つまりマクロ的に広い視野から、こういう問題を研究する必要があると思います。

次に具体的なことについて、つまり大虐殺の研究についてお話ししたいと思います。まず1つは概念の問題です。概念というのは、名称についての問題です。最初に、軍事裁判では、南京虐殺と言っておりましたが、80年代には、中国を侵略した日本による南京大虐殺と名前を改めました。中日の歴史上、非常に特別な事件ということですので、辞書にも、今は南京大虐殺と書いてあります。中国では南京大屠殺と書きますが、日本では、多分、同じように名称あるいは概念も変わってきていると思います。日本では、多分、南京事件と言う人が多いと思いますが、洞富雄先生もいろいろな意見を述べておりましたが、南京事件なのか、南京大虐殺なのかと。なぜかといいますと、南京事件というのは幾つかありましたので、南京事件イコール南京大虐殺と言っていいのかどうかということなのですが。そのように異なった意見もあります。あるいはその中身ですね。中身から名前をどのように決めるかという問題もあります。その時空概念というものが1つの要素になっております。

中国では時空概念も変わってきております。先ほども申し上げましたが、1980年代以前は、だれも研究しておりませんでした。80年代以降に研究が始まりまして、研究の度合いも深まってきております。ですから、時空概念も変わってきております。南京大虐殺はいつから始まったのかということですが、一般には1937年12月13日からと考えております。しかし実際には、それは南京城が占領された日ということですので、そこに至る過程において、日本軍の暴行は、いろいろな日記や史料や写真からもわかるように、それ以前から始まっております。ですから、南京事件はいつから始まったのかということですが、中国の学术界では12月の初めごろと考えております。南京を侵略し、その過程において、12月の初めごろから、もう始まっていると考えております。そして、それがいつ終わったのかということですが、私どもは調査なども行ってございまして、日本軍の暴行、あるいは虐殺は、その後も起こっておりまして、次の年の3月までと考えております。このような考え方は日本の笠原先生の考え方と一致していると思います。12月13日は占領した日ですね。そして、1938年3月18日までということで、この期間が虐殺の期間であったと考えております。以前は6週間と言っておりましたが、そうではなくて、

3カ月以上あったと思います。

それから、日本の学者にとって、この時空概念も異なっていると思います。一部の学者は、南京城内だけと考えています。また一部の学者は、城外（郊外）の暴行も含まれると考える学者もいらっしゃいます。そして、城外の農民たちは、やはり字も書けないということ記録することができなかった。したがって、日本軍の残虐行為というのは市内だけなのか、あるいは安全区内だけだったのか。安全区というのは、城内の8分の1の面積しかありません。そして、当時の南京城という概念に照らし合わせて、南京大虐殺がどの地域で起きた事件なのかということですね。そういうことも考えなければいけないと思います。当時、日本軍がある時間、ある地域において行った行為は、その地域をどこにするかということがちょっとはっきりしないわけですので、その時空概念が変わってきています。ですから、いろいろな史料を検討しなければ、それを明確にすることはできないということです。

それから、規模についても同じように、さまざまな異なった意見があると思います。その時間と空間の問題ですが、南京大虐殺はどういうものだったのか。その捉え方によって随分異なった結論になってきます。この辺も重要だと思います。

そしてもう1つ申し上げたいのは、南京大虐殺で殺された人数の問題です。国内では、これは、とてもセンシティブな問題だとされており、日本に参りまして、ここ数日、東京財団の皆様といろいろ議論しましたが、ほぼ一致した見解があります。30万人という問題は政治的な数字の問題になってしまったということです。これを政治的な問題と理解することはできるだろうということは一致しております。他方、中国ではこの数字の問題は絶えず模索がなされており、絶えず研究が行われています。したがって、この数字は一度固まったら絶対に動かないというものではありません。その規模ですが、中国の大虐殺に関する理解の推移によって、35万人になったり場合によっては50万人だったり、いろいろな数字を言う人がいます。80年代になりますと、最初は学者の研究では、東京裁判と南京裁判の判決書を基に、30万人という数字を確定した正確な数字だとしたので、すね。でも、これは正確であると同時に、おおよその数字でもあるわけです。一定の道理があるのですが、これは裁判所が、いろいろな調査をして判決を下したところで使った数字ですから。しかし、いろいろな数え方もあると思います。具体的に、集中的に虐殺が行われたのか、分散していろいろな人々が殺されたのか、あるいは遺体の数え方でどれだけの遺体が埋められたかということから、数字を取るような方法もありました。他方、中

国では、この数字がどのように形成されてきたかということについて、決して一番多い数字を取るということではありません。日本の戦争犯罪人に反省を促すとか、そういったことを考えながら、一番多い数字を取るということは決してありません。

しかし、今の問題は、この人数について議論する場合に、先ほど程先生もおっしゃいましたが、いろいろな史料がどれだけのものを証明できるかということが、とても重要だと思うのです。南京大虐殺研究で重要な研究者を見ましても、人数に関する諸説について、コンセンサスが必要だろうということです。というのは、一度固まったら、それで永遠に変わらないというわけではありません。その過程というものもあるでしょうし、史料に基づいて研究するということが重要です。南京大虐殺研究者の中では、そのようなコンセンサスは既に得られていると言っていいと思います。南京大虐殺という史実を前提として、人数については実質的な研究をすることは可能だと思います。

実際に私たちは既にそういうふうに行っています。もちろん南京の学者のみならず、程先生もそうですし、北京でも最近、中日歴史共同研究の中国側責任者（座長）である歩平先生も同じようにメディアに対して、南京大虐殺の性格を認めた上で、人数については議論の余地がないわけではない、議論はできるということを言っております。人数の問題について学術的な議論をするという過程を、これからも展開していけば、これは一種の進歩、とても大きな進歩だと思います。人数の問題については、このような見解です。

そして3つ目に、時間があまりないようですので簡単に述べたいと思いますが、南京大虐殺の原因についてです。最初に中国で原因を模索しました際には、こういう見解がありました。日本への反論の一つとして、大虐殺は計画的に行ったということです。つまり日本が計画的にやったということですが、それ以外にも、南京大虐殺の原因として心理的なものもあったということです。戦争ということで、特に支那人というような呼び方がありました。そのような文化の側面というのでしょうか、いろいろな側面から戦争の心理状態とか、いろいろなことです。場合によっては、日本は最初から計画的に組織的に大虐殺を行ったというような事例もあるでしょう。もちろん捕虜を虐殺するという、これは命令だったのか。程先生が論文を書いていらっしゃいますが、これは計画的で組織的だったのかというのは、いろいろな議論の余地があると思います。大虐殺の原因については、いずれにしても、多角的な視野で、いろいろな側面から研究できると思います。大虐殺の原因を探るのはとても容易なことではありません。もちろん原因を探れば、今後、同じようなことが起こらないように、それを防ぐことができると思います。したがって、一体、

何が日本軍をそのような虐殺に走らせたのか、いろいろな側面から検証していくことが必要だと思います。

また、中日の間でいろいろな溝があるのですが、それについて私の個人的な見解をちょっと述べたいと思います。正しいかどうかはわかりませんが、述べてみたいと思います。

まず第1に、歴史の認識に対する政治の影響はとても大きいということを述べたいと思います。これは中国でも、日本でも同じだと思います。もちろん冷戦という概念がありまして、いろいろな問題はイデオロギーの影響を受けたわけです。そして、学術的な研究が阻まれた時代がありました。これもとても重要な点だと思います。1962年に、南京大学の曹ソ先生が学生たちとともに南京大虐殺の調査をしようとした。しかし、それを続けることができなかつたのです。小さな冊子ができましたが、それは出版を許されませんでした。それは何年もたってから、80年代に上海人民出版社から出版されました。このように、政治の影響は中国で出ております。また日本では、もちろん多くの学者の方々と議論しますと、なぜ日本では、そういう研究ができなかつたのか。それは政治的な影響があるということですが、これについては詳しくは触れません。

そして2番目に、研究者と社会の一般大衆の立場というのでしょうか、身分というのでしょうか、そういうものの限界、制約があると思います。一般人、一般の中国人としての立場、あるいは日本の方は日本人の立場、視野からものごとを見れば、本当は日本に対抗するという姿勢、感情論があることは否めません。第三者として研究することはなかなか難しくなってしまうわけです。私もいろいろな西側の学者に聞いたことがあるのですが、西側の人たちは、なかなか理解できないと言っています。これは政治の問題の影響があるということです。つまり、いろいろな立場がありますので、ほんとうに客観的に公正に南京大虐殺の研究をすることはとても重要なことなのですが、大変難しいということです。このように、立場とか身分の制約というものがあつて、なかなかそれができない。もちろんこういったことに関しては、一人一人が努力をしていかなければいけないと思います。また、このような身分とか立場の制約があり、またメディアや世論、政治家と結びついて、社会全体、一般大衆が絶えず、身分とか立場という意識を強めていると思うのです。どういう意識かと言いますと、例えば中国側としては被害者意識、日本の場合は加害者という意識はあまり強調されていないのかもしれませんが、場合によっては、自分は加害者ではないという意識ですね。そういうふうに立場や身分が異なるという問題があると思います。

もう1つ、史料の問題も挙げたいと思います。これは中国でも、日本でも、20世紀で使われていた史料を見ますと、きちんと史料を整理・収集するといようなプロセスは、まだまだ限りがあります。このような史料をすべて、自分たちが入手することができて、すべてのものを回避せずに、全部、紐解いてみるならば、かなり認識の溝は埋められると思います。もちろん史料を解読する方法が違うのかもしれませんが、しかし、大量の事実を否定することは、とても容易なものではありません。あるいは重要な史料ですが、学者としましては、大量の史料をすべて整理・収集するのは大変膨大な作業であります。もちろん史料をきちんと持つておくことはとても重要です。大虐殺にとって最も直接的で重要な史料は、なかなか得る機会が少ないということも言えます。また戦後の日本で、南京における軍上層部のいろいろな史料が今どれだけ残っているか。そういったものはかなり少なくなっているのではないかと思います。

また実際に私たちが実施したのは、生存者のヒアリングをしたり、あるいは加害者の人々に対する聞き取りですが、これは80年代になってから始まったのですが、さまざまな中日の矛盾が出てから、そのようなヒアリングを始めました。その目的は、先ほども言いましたように、対抗するためというような側面が多かったわけでありまして、したがって、私たちの議論をさらに深め、コンセンサスを得る上で、今、史料の不十分さが障害となっております。

また歴史で共通点を見出すことはできるのか。できないのではないかというほど悲観的になる必要はありません。今、中国の学术界ではいろいろな変化が出てきております。これまで対話できなかったようなところも対話ができるようになってきています。まず第1に私が思いますのは、客観的、学術的に共通の議論をすることが極めて重要だと思えます。客観的・公正な立場から、このような問題について研究すれば、共通点を見出すことができると思います。

次に、東京財団がこのような機会を与えて下さりまして、異なった意見の人が、ここで意見を述べることは非常にいいことだと思えます。私どもも南京で、異なった意見の人々のシンポジウムなどを開催しております。国際的なシンポジウムも開催しており、そのような場で異なった意見の人が一緒に集まって意見を述べることは非常に重要であると思えます。やはり研究の国際性を強化していかなければなりません。先ほども申し上げましたが、人々の考え方、視野というものは、中日を乗り越えて、日本と中国の立場だけではなく、もっと広い視野から、人類・文明史という視野からこの問題を見ていけ

ば、多くの問題について対立しないで済むと思います。そして多くの学者、第三者にも参加してもらい、研究を進めていく必要があると思います。多くの人に入って来てもらい、第三者の立場から、西側の学者などにも来ていただき、もっと広い視野をもって、この問題を研究していく必要があると思います。ですから、90年代から、多くの西側の学者も、この研究に着手しております。そうすれば、共同認識を深め、それぞれの欠点を見出すことができ、南京大虐殺の真実を見出すことができると思います。

そして最後に、笠原先生は1999年に中国に来て講演してくださいました。先生は、このようなことを言いました。南京大虐殺の問題は、日本軍や、あるいは日本人の責任問題という観点からだけではなく、人類の歴史の問題として考える必要があるということを行いました。そして、戦争が暴発した原因を明確にすること、歴史の教訓から学ぶこと、それによって過去の傷を癒していくこと、国家や民族の対立・衝突の時代だった20世紀を乗り越えて、ともに人類が共存する21世紀を切り開いていこうということを行いました。彼の言ったことは非常にいいことだと思います。共通点があると思います。私どもも同じように考えております。

今日、率直に意見交換ができることは、今後、南京事件の問題について認識をともにし、反省し、このような反省は中日友好のためにも有益であり、それを促進できると思っております。以上です。

【司会】 程先生、張先生、大変具体的に、そしてまた極めて高い視点から、この問題についてお話ししてくださいまして、ありがとうございます。

既に皆様のほうから、質問状も数通出ておりますが、会場の方で、我こそはという方、まず2人くらいでどうぞ。

【質問者】 どうも張先生、程先生、非常に貴重なお話を伺わせていただきました。ありがとうございました。

私は、両先生が言っている中で、ちょっと気になったのは、両先生とも、日本側の歴史認識ということを行っているのですね。日本という国は自由民主主義の国なのです。したがって、日本の歴史認識というものはありません。そういうものは存在しない。日本には、皇国史観を取っている人も、唯物史観を取っている人もいまして、いろいろな歴史観があるのです、日本には。何か、それが日本の歴史認識というものがあるという前提で考えられるのは大変な間違いなのですね。程先生は、日本の歴史認識は多元化しているということは認めておられるのですが、そういうふうに認めたら、日本には特定の歴史認識があっ

て、それが中国の歴史認識と衝突を起こしているというような問題の取り上げ方はされない方がいいのだらうと思います。

中国の場合には、中国の歴史研究というものがあるのかないのか、私はちょっと疑っております。要するに、私は昔ブレジネフ時代にソ連にいたのですが、ソ連では、1つの歴史認識があって、正しい歴史認識がありまして、それを時々変えるのです。フルシチョフからブレジネフになったら、フルシチョフの大祖国戦争の役割は大訂正されるのですね。私はモスクワ大学にいたのですが、これは大変な作業なのです。当時のソ連の歴史学者にとっては、中国においても、そういう中国の歴史観を作っておられるのではないかということで、日本と中国は体制が違いますから、そういう点で大きな違いがあるということは、もう少しご認識いただいた方がいいのではないかという気が聞いていてしました。それが第1のポイントです。

第2のポイントは、ナチスと南京大虐殺を比較するシンポジウムをされたということなのですが、そのシンポジウムをされることは結構なのですが、私はイスラエルの大使をしておったのです。そのとき、李鵬さんが来まして、南京大虐殺とホロコースト、600万人のユダヤ人が殺されたことを同列に並べて議論したのです。これはユダヤ人にとっては大変受け入れがたい話なのです。そのとき、李鵬さんに直接的な反応は示しませんでした。ユダヤ人は大変怒っておったということなのです。したがって、そういうことをやるのが、ホロコーストとの関係でどういう反響をもたらしているかということは、もう1つわかっていただいていたほうがいいのではないかなと、私は思います。

第3点目は、史料に基づく議論ということを両先生とも非常に強調された。私は、ちょっと伺いたいのは、中国において、そういう関係の史料はどれくらい出ているのでしょうか。ロシアでは、1991年の革命の後、かなり出たのです。その後、また今のプーチン政権になって、史料は隠されていっているのです。そういう点について、共産党の史料とか、中国の政府の史料はどのくらいオープンになっているのかということについて伺いたいと思います。以上です。

【司会】 では、少し質問を出していただいてから、ご回答をいただきましょう。どうぞ。

【質問者】 私は一市民として、日中関係について深い憂慮を持っております。私が生まれた頃から日中戦争がずっと続いて、大戦に至ったと。この歴史を今振り返って、自分の一生についても、戦争が及ぼした影響は大変深く思いをいたしているわけですが、今日、

両先生がお話しされて、市民として非常に勇気づけられたのは、学者として、かなり難しいお立場にありながら、ご自分の良心に従って、史料を集めできるだけ客観的に研究をなされようという姿勢が見られたことであります。しかし、今、ご質問された方も聞いておられたように、十分に中国の歴史の専門家の方々が考えていることを発言するとか、主張するとか、そういうことはまだまだ大変難しいのではないかなとも感じています。

と申しますのは、つい最近、日本で最もよく売れている雑誌で「文藝春秋」というものがあるのですが、この雑誌に、中国で大変論争を巻き起こしたインターネットの論文がございまして、その抜粋が紹介されておりました。これは先生方はお読みになっているかどうか、大変興味深い論文でございましたが、中国語では発言できないので恐縮ですが、趙無眠という方が書いた膨大な資料、7万2,000字ぐらいの資料だということなのですが、これを書いた方は決して日本びいきではないけれども、中国で日本軍がさんざん暴虐を究めたけれども、それに負けないぐらい中国の国民党並びに共産党の軍隊が、中国の人たちにひどい扱いをしたということが、るる書かれているわけです。南京大虐殺の問題については私もいろいろな本を読みましたが、どれが真実かわかりません。しかし、これはこれで進めていくことは必要だと思いますが、同時に文明史的な観点を強調された張先生のお話がございましたが、やはり共産党の軍隊とか、国民党の軍隊も同胞に対してどれだけ残虐なことをやったかということと比較することによって、日本軍の残虐行為というものが相対化されて、客観的に見られるのではないかと。こういうような気もいたします。果たして、そういうことができるのかどうかですね。中国の学者たちは、そういうことができ初めて、史料に基づいて南京事件はこういう結論だと、我々日本人を説得することができるのではないかと。このインターネット論文の結論は、歴史はあまりにも複雑過ぎて、簡単に結論が出るものではないと。どちらがいいとか、悪いとかという結論が出るものではないのだということを目指されていた。非常に立派な論旨だと思って読みましたが、もし先生方がこの論文を読んでおられるのであれば、そのお立場から論評していただきたいと思えます。

【司会】 一回、ここで切りたいと思しますので、また時間があればご質問いただきたいと思います。

去年、中国に参りましたとき、私は程先生のご自宅にお招きいただきました。そうしましたら、ほんとうに膨大な量の日本語の本、今、お話が出ました「文藝春秋」が全部揃っておりまして、その他、各国の文献から何から、よくぞこれだけというぐらい、大邸宅

に大変な量の史料を集めておられ、それを間違いなく読みこなしておられる状況に私は感銘いたしました。程先生は、実は大変日本語もお上手です。張先生は英語に非常に強いということで、いろいろな方面から皆さんが研究しておられることを感じましたし、またお話にも出ましたように、既に去年の段階で28巻にわたる膨大な史料集を中国は発行しています。ただ、今、お話を聞くと、今年中にさらに20巻発行すると。これはちょっと日本側には、こんなには揃っていないのではないかなという思いをしながら私は話を聞きましたし、その28巻は日本でも購入することができる状態になっています。中国側が大変熱心に、この問題に集約的に力を集めておられる点に私は感銘したわけです。

皆さんの質問の中でも、中国に歴史観というものはちゃんとあるのだろうか。それが1つのサイエンスとして確立されているのかということとか、やはり全く同じような感想で、日本の歴史観という言葉は使わないでもらいたいと。自分の隣に座っている人は必ず違う歴史観を持っているぐらい、日本はばらばらな国であるということを認識していただきたい。こういう質問も来ております。それから、今の中国人が中国人にやったことと比較すれば、この問題は小さなことではないかといったような考えをする人もいますが、それはおかしいのではないかという質問が前もってありましたことを、あわせてご紹介しておきたいと思います。

質問は、したがって、史料は全部、果たして中国では公開されているのか。それから、同胞にやったことと相対化することについて、お二人はどう考えるかと。この2つかと思いますが、その2つにどちらかの先生がお答えいただければ助かります。

【程】 まず最初の方ですが、中国の学者に対してはとても厳しいご質問、問題なのですが、もちろん先ほどおっしゃられたとおり、日本は多元的な社会で、歴史観はないというようなご指摘でしょうが、私もそのとおりだと思います。強権社会とか、集権社会であれば、いわゆる歴史観というものがあるということなのでしょう。日本の方にとって、中国というのは唯物史観の国かもしれません。ただ、私も中国人の立場として言うならば、一人ひとりの中国人を見たら、実は歴史観はない。というのは、公の方の歴史観というのは私の歴史観を代表しているかということ、そうでもないかもしれない。率直に言うならば、本当に日本について知るならば、日本には歴史観はない。

そして、私の感じたことを言いますと、中国政府、中国の民衆が歴史観、歴史観と言うのは、それは日本の政府に対して言っているのではないのでしょうか。私がさっき言った歴史観というのは、東京裁判は国際法的意義のある裁判であったと。日本の政府も認めてい

るわけです、その裁判の結果は。それがただ一致していないということ、それが問題なのです。日本の民衆は確かに多様性があります。また、表現の自由があります。

先ほど、ナチスのホロコーストについてコメントがありました。南京大虐殺とナチスのホロコーストは、もともと質の異なることだと思います。性質が全く異なる事件だと思います。日本軍の中国での暴挙とナチスを比べますと、ナチスの場合は計画的にヒットラーの理念の下で、スラブ民族も含めてユダヤ人を人種的に抹消しようとしたのです。一方、日本は当時、どの程度の人が信じていたかは知りませんが、それとは逆に大東亜共栄圏ということを行ったのです。その点から見ますと違います。また日本軍は、至るところで自分たちの政権、親日政権をつくりました。これはヒットラーとは違うのです。ヒットラーはソ連に行きまして、映画などを見ましても、場合によって歓迎する人もいました。ドイツ軍がソ連共産党の体制から解放するというので。ヒットラーのドイツはソ連の抵抗力を高めたということにもなります。その性格としまして、要はナチスのホロコーストと南京大虐殺は違います。日清戦争以降、中国人を蔑視したと。例えば、「ちゃんころ」とか、「ちゃん」というような言葉がありました。そういった状況はありましたが、民族的に抹消しようということはありませんでした。そして、イデオロギーの度合いというか、より上層部にあった日本人は、中華文明、古来の文化については大変尊敬をしていました。一方、戦争の中でいろいろなことが起きてきますと、その視点から見て、もちろん中国の文化を崇拜していたということだけでは解釈できない部分がありますが、確かに違うと私は思います。

また、そちらに座っていた方ですが、国共戦争のことに関しても、今、いろいろ自由な議論ができるようになってきました。例えば国民党が消極的に抗日戦争をして、積極的に反共をします。実際には国民党と共産党の中では、抗日が相互に合法性を得るための重要な手段であったわけです。したがって、抗日戦争が終わった4～5年の間に、すぐに大規模な国共両党の間に戦争があったのですが、そのときの戦争の激しさは抗日戦争をしのぐものでした。その時代に国民党と共産党は第一の敵というか、むしろ相手のことを究極の敵として戦ったのです。既に時がたっておりますから、あまり言いませんが、今、国民党と共産党はお互いに歩み寄ろうとしているところもあります。

客観的に歴史を振り返るならば、毛沢東、周恩来が日中関係について議論していた時は、今の人から見れば、彼らの議論の含みやニュアンスは想像が付きません。例えば国交正常化の際の報告ですが、日本では2001年に、国交回復のときの会談記録が公開されまし

た。法律でもいろいろな決まりがありまして、30年で公文書を公表します。2年間の猶予期間があるので、32年ですべてを公開するというわけです。中国ではそういった期限の指定はありませんが、日本の外務省が公表している中日の会談の記録は、私たち研究所でも昨年の10月号で発表いたしました。その刊行物は私たちの研究所の中を出しているものなのですが、そのときの編集長は上層部から審査を受けずに載せました。戦争賠償の話ですが、当時はどのような会談の仕方があったのか。これは蒋介石とか、周恩来を攻撃するということではありませんが、私も実際にそれを読みました。日中間の会談では、1文字についてほんとうに議論が繰り返されました。大平正芳さんと中国の姬鵬飛外相との会談で、賠償問題について、一部の軍国主義者に罪があるのであって、大半の国民は罪がないと言っています。会談の記録を見ますと、敵というのは国民党であったとしているのですね。もちろんソ連という敵もいましたが、この記録について、私は2つの問題があると思います。日本軍がどのような行動をしたか。そして、国民党と共産党自身が何をやったかということ。これは別の問題ですが、これを否定するか、肯定するかということは別としまして、そういったところは問題だと思っています。

【司会】 どうもありがとうございました。今の質問と関連しまして、2つ前もって来ている質問があります。1つは、皆さんは台湾の研究者とは共同研究をしておられるのでしょうかという質問がありますが、これはいかがでしょうか。

【程】 台湾の学者は、これまでは国民党が政権を取っていた時代ですが、中日研究、あるいは抗日研究というものをとても重要なテーマにしていました。今は、それについてはあまり関心を示していないようです。これは視野の外に置かれていると言ってもいいと思います。私の同僚が台湾へ行き、中央研究院とか台湾大学で、私のことを紹介してくれて、討論会をしないかと言いました。しかし台湾側が、これは今、台湾ではあまり関心が高くないのですよという答えでした。以前は関心が高かったと。例えばエイカン先生は共産党の歴史の研究をしている人なのですが、そういう関心はあったのですが、新しい本で、抗日戦争関係のものはほとんどないという話でした。

【司会】 はい。それから2人の方から、国際社会では中国はチャイナであると。日本人が中国をチャイナないしシナと呼ぶのは順当であると思うのだけれども、両先生は、このことについてどう思うかと。しばしば日本人がシナと言うことを中国の方が忌避する傾向があるけれども、世界は全部皆さんの国のことをシナないしはそれに準ずる言葉で言っているのではないかと。こういう質問が2人の方から来ておりますが、いかがでしょうか。

【程】これは、次のように考える必要があると思います。漢字と英語の意味はちょっと違うと思います。英語ではチャイナと言いますが、昔から、日本の卑弥呼の時代でありましたが、中国と日本の交流が始まりました。卑弥呼という漢字は、中国ではあまりいい意味ではないのです。それは中国の方も反省しなければならないと思います。それを言う人たちは、中立な立場から言っているのかもしれませんが、例えば、私が今、日本人に対して倭人と言うと日本の方は非常に怒ると思います。ですから、昔はこのような時代があり、言葉というのはあるのですが、それによって反感というのでしょうか、昔の記憶が蘇ってきますので、あまりいい感じはしません。両国の関係が非常にいい関係であれば、先ほどの言葉は使わない方がいいと思います。日本では今でも一部の人が、例えばシナと言うもいます。私はそれをあまり気にしていませんが、それは1つの言葉として残っています。しかし、私は日本人に対して倭人とは言いません。

【司会】 東シナ海という海があって、日本海という海があって、日本と海を隔てるある国は、両方とも東海と言えと言いますので、東海が日本の近くに2つあるという大変不便な現象が起こっていることをご記憶いただければと思います。東シナ海と私は言っていますし、日本海と私は言っていますが、どういうわけか、中国は東シナ海を東シナ海と言いたくないのでしょうか。また韓国は名前を変えたいと言っているようであります。これは別に質問でも何でもなくて、私の感想を述べただけですが。

【程】 私もちっとよろしいでしょうか。これは感情的な立場に立って、ものごとを言うべきではないと思います。私も中国で反日的な人と話をよくします。例えば、中国の学者でチンという学者がいますが、その人は江西省の人なのですね。このチンという人は日本では非常に評判が高いのですが、中央研究院の所長をしております、中国で最も傑出した学者であると言われております。彼の論文の中には、みんなシナと書いてあります。

【司会】 ありがとうございます。ドアの近くで、どなたか手を挙げておられましたが、どうぞ。

【質問者】 きょうは、どうもありがとうございました。1つ質問があります。

極東国際軍事法廷なのですが、そこで当時の日本人の大部分は、南京事件なるものがあったということを初めて知ったのですが、そのとき、中国側の証人として、米国人ですがマギーさんという牧師が証人台に立たれた。そのときに彼が目撃した殺人事件は1件1人だけであるということを証言していますが、ご存じでしょうか。なお、ついでに言いますと、彼は人から聞いた情報としては、あちこちで大勢殺されたというようなことを言って

いるみたいです。

【程】 もちろん私もそのことは知っております。東京裁判の史料については、私はよく読んでおります。東京裁判は、ある人は数万人殺されたのを目撃したと。例えばロスーという人が5万7,000人くらい殺されたと。それを目撃したと言っております。つまり、彼は非常に正確な数字を言っております。私は、これは物理的には不可能であるということを行いました。もう少し少ない数でも計算することはできないと言いました。人数のことなのですが、当時は問題があったと思います。例えば先ほどの証人は1人しか目撃していないと。それは事実に基づいて言っていると思います。聞いたのと目撃したのは事実に基づいていると思います。あと、他のことは、例えば、他のところで起きたことは見てないですね。その人は見ていないのです。ですから、そういうことを全部総合してみる必要があると思います。

日本の学者で東京裁判を否定したり、あるいは南京事件を否定している学者は、このように思っていると思います。つまり東京裁判は問題があると。私も問題があると思います。日本の学者も気がついていないところがあるかもしれません。当時、南京を占領した日本軍将校、あるいは中国側の将校、つまり中国側にはハンという将校、日本側は小川という将校がありますが、彼らの書いた日記などを比較してみますと、やはり異なったところがたくさんあると思います。彼らは、このような証言をしたということですが、その証言の内容が全然合っていないのですね。ですから、それは偽証かもしれません。

今、21世紀に入っております。ですから、やはり史料に基づいて分析しなければなりません。ものごとは非常に複雑であると思います。ですから、すべての史料を収集して、総合的な判断を下す必要があると思います。

【司会】 はい、張先生から何かこの点について。

【張】 マギーの問題ですが、東京裁判の証言から、南京大虐殺がなかったということですね。これを学者はどう見るかですが、南京にいた西洋の人のいろいろな書簡とか日記を見ますと、これはマギーも含めてですが、80年も経ってから、これを議論するとなりますと、やはり事実からかなり距離が出てくると思います。またマギーは実際に南京について映画をつくりました。この映画は今も見ることができますが、赤十字の会長と一緒に、写真や書簡が残っています。それを解読してみますと、実際に傷ついた人、あるいは殺害された人を見たわけですが、東京で話したものと実際とは異なっていたと思います。もしいま生存者に聞き取りをするならば、彼らの語る事実と本当の事実は同じなのかどうかと

ということですね。例えば古い兵士ですが、虐殺などはしなかったと言ったとします。でも、ほんとうに虐殺はなかったのか。それは一定の距離があるかもしれませんし、またその人自身は虐殺には加わらなかったかもしれないけれども、他の人はやっていたかもしれない。学者としましては、あらゆる史料を網羅して当たっていくということが重要だと思います。1人の人に聞いて、それがすべてというわけにはなかなかいかないと思います。したがって、東京裁判でそういうことがあったということはもちろんわかりますが、日記や映画がどのように記録しているか、それらを比べてみる必要があると思います。そして問題点が見えてくれば、それを客観的に公正に学術的な側面から検証する必要があると思います。もちろん、それで否定するというものではありませんが、何かの局面を取り出して、この人がこう言ったということだけでは一般化はできないと思います。

【司会】 ありがとうございます。私が2人に会ったときに、こういうことを私は言いました。虐殺という言葉が我々はちょっとあいまいに使い過ぎているのではないかということをお願いしました。つまり戦争というものは、戦闘員が戦闘員を殺したら、これは英雄と言われるわけです。戦闘員が非戦闘員を殺したら、これは殺人者と言われるわけです。この区別をはっきりしないと、そのときの戦争での殺し方が残虐であろうとなかろうと、丁寧に少しずつ殺そうと、切り刻もうと、これはどうあって虐殺というか、要するに、これは英雄です。相手を切り刻むのは、いささか英雄ではないかもしれませんが、とにかく戦闘行為で勝利をおさめるのは、その兵士の務めであって最善を尽くさなければいけない。ですから、そういう人が一体、この中で、どれだけの人が戦闘中に死んだのかということをはきちんと計算しなければいけない。

他方、数の数え方ということについても、私は、今から34～35年前、インドとパキスタンの戦争でバングラディッシュが独立したときと、ベトナム戦争でずっと国際赤十字の現地代表をやっておりまして、そういう現場をいっぱい見ました。どこそで虐殺というので、それ行けというので行くのですが、これは実に怖いもので、国際赤十字の外国人が行っていても怖いです。実際、ある女子高校で17人殺されるのを見たとか、小学校の校長がみんな殺されたというのをいっぱい私は見ております。ただ、これは後からレポートを見ると複雑で、殺されたときに登録されて、それから遺体を勘定するときに数になっていて、埋められた方はおれは何人を埋めたというので、大変複雑で、よほど冷静にコンピューターでも使って、きちんとやらないと。また同じような名前が実にたくさんあって、なかなかほんの数十人のところでも、自分自身で30人ぐらいのスタッフを使っ

てやっても、それだけ苦労したことから言いますと、何十万人とか、何万人というのは、同じ国際赤十字の代表でいながら、私はできなかったという思いがするのが率直な気持ちであります。

ただどんなことであれ、不法な殺しというのは1人であっても、これはしてはならないことであり、これが全くゼロであるという思いは、私は、東京財団で今までこの研究にいささかでも携わったり、両先生のお話を聞いたりして、不法な殺害がゼロだったとは私は必ずしも思いません。しかし、もちろん30万人という数字も私は思いません。東京財団は、その30万人と書いてある南京屠殺記念館の館長さんを実はお招きをしたかったのですが、その人に代わって、お二人が中国から来ていただいたことを私は非常に多としたいと思っております。

では、もう時間がありませんが、最後にもうお一方どうぞ。

【質問者】 短く質問をさせていただきます。要するに先生方がおっしゃっているのは、中国でもまだ結論が出ていないということですね。そうであるならば、今、司会者がおっしゃった南京の記念館、あそこに30万人と書いてありますが、あれは即座に消すべきですね。これは消さない限り、矛盾がありますよね。今の先生方の発言というのは、しかも、先生方は、司会者の言葉を借りれば、南京大虐殺の中国における最高権威であられる。とするならば、胡錦涛政権に堂々と、「これは違うから、この数字はまだ待ってほしい」と言って、すぐ撤去を求めるのが学者としての誠実さではないでしょうか。以上です。

【司会】 両先生、今のご発言にコメントはありますか。ないならばないで結構です。強制はいたしません。

【程】 それは一学者あるいは一個人が決められることではないのです。先ほども言いましたが、私の態度としましては、実際に何人かということ、これは本当に永遠に数え切れないかもしれません。史料を基にしましても、そうかもしれません。私がもしも記念館を運営しているということであれば、私は最初から、そういう数字は書きません。

【司会】 張先生は、何かご発言はないですか。はい。

ということでございまして、きょうは大変有意義な話し合いができたかと私は思っております。どうも両先生、ありがとうございました。皆様、どうもありがとうございました。

了